

Title	アーサー・ペンティの歴史観 (二)
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.2 (1921. 2) ,p.267(111)- 275(119)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210201-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

sex の斷定したやうな男女混交の事實を證據立て得る材料は存在して居ない。

是と關聯して居る團體結婚に關しては二つのことを注意するに止める。第一は團體結婚と云ふ言葉は混雜を招き易いから寧ろ性的共產主義 (sexual communism) と云ふ方が適當である。即ちこゝに於いては性的關係が一つの社會團體の男と他の社會團體の女との間に正統として認められるのである。第二に等級制度は必然的に性的共產主義の狀態から生ずる二三の特徴を有して居る。等級制度の普及は此の共產制度を一般化するが、然しこれが人類社會の進化に於ける最初の段階であるとは云へない。

吾人は以上の研究に依つて如何なることを教へられたか。吾人が時に無稽であるとかあり得べからずと思考するものも、是を實際狀態に就いて考察しない内に退くべきではない。更に多

くの證據を採求する必要がある。次に心理學は社會研究に於いて極めて重要であることは勿論であるが、それは心理的見地から離れて觀察し得る社會的過程の附隨物たるに過ぎないのである。

最後に以上述べた如く社會組織と親族關係とが極めて密接なる關係を有するものであるが、それは單に大體に於いてのみならず細節に迄及んで居るのである。ある社會現象が心理的類似を有するならば、それは如何にして生じたか。其の類似の依つて生ずるところを討究するならばそれは決定的 (deterministic) なものであることを知るだらう。斯して社會學の科學たる地位を獲得することが出來得る。(大正十年一月十九日稿了)

アーサー・ペンティの

歴史觀 (二)

加田 哲 二

五

Penty に依れば歴史は多元的の觀察が許さるべきものである。故に唯物史觀は、其の氣質において唯物論者でない歴史の研究家がよく知つてゐるやうに、一面的であつて、牽強附會の觀察である。それは歴史における唯だ一つの要素を抽出し他の要素を無視することによつてのみ、その成立が可能である。さうして斯くの如き學說が今日において勢力を得てゐると云ふのは、資本主義が、すべての過去の偉大な傳統を亡ぼし、その生命の内容を空虚にしたからである。唯物史觀によつて、現代のやうな歴史の一面を

解釋することは出来る。またギリシヤ並にローマの末期、宗教改革後の歐洲の如き時代の歴史は之を解釋することは出来るのである。何となればすべての文明の衰亡期にあつては物質的要素が非常に重要だからである。然し、その時期が歴史全體及び中世と云ふやうな特殊の時代になると唯物史觀的解釋は全然誤謬である。さうして、斯くの如く歴史全體または中世紀と云ふ特殊時代についての唯物史觀的解釋を眞理なりと思ふ人があるなれば、彼は歴史について無智な人である。

斯様な見地から見ると唯物史觀は、歴史全體または特殊時代の觀察としては誤謬であるが、現存する社會を破壊するのを目的とするのは、最も適當なものである。けれども唯物史觀は新しい社會的理想の構成を妨害するものである。何となれば Marx の將來に對する豫見は今

日において誤つてゐるからである。ある程度までは Marx の云ふ所は眞理である。彼は産業界の趨勢が資本の集積とその集中にあるものと見た。然し、彼がこの豫想から歸納した議論は正しいとは言へない。彼は今度の戦争を豫想しなかつたからである。今度の戦争を豫想しなかつた彼は、また現在の制度が徐々に滅亡して行くことも豫想しなかつたのである。さうしてこのことは彼の全社會學說に對して致命的なことである。何となればそれは彼の全學說における弱點を暴露することだからである。Marx は社會における物質的勢力をある點まで非常に明瞭に認めた。この點において彼の學說は非常に研究の價值あるものである。然し、彼はこの物質的勢力が社會的歴史の半面であり、且つ他に重要な半面の存することを解し得なかつた。即ち彼はすべての物質的變化と共に心理的變化のあること

を認識しなかつたのである。戦争の場合を取つて見ると Marx は競争の壓迫の加重することが國民的嫉妬の増加を伴ふことを豫見することが出来なかつた。然るに彼はその千八百四十七年執筆の共產黨宣言において國民的拮抗が漸次減少することを吾々に告げてゐる。斯様に彼は國民的心理をその根本において誤解してゐるので、彼の見解は實際的歴史的の觀察には、不當なものである。だからこのことを證明する爲めに吾々は次のことについて Marx を研究しなければならぬ。もし彼が、その心理的要素を無視したために國民的關係の問題において誤謬に陥つてゐるとしたならば、彼は他の方面においてもまた均しく信賴し得ないだらうか。事實において國民的關係の弛緩が、産業においても起つてゐないかどうか。また彼が豫想した産業的集中の過程が、社會の内部的分裂を伴ふかど

うか。さうしてこれ等のすべての結果が、彼の所謂無産者階級的産業國家か、または社會的無政府狀態への退歩であるかどうか。これ等の問題を研究しなければならぬのである。斯様な Marx の論述したやうな社會的進化の法則は經濟的發達の普通の狀態であるかの如くに思はれる。何となれば生活から經濟的考察以外のすべてのことが抽出されると(産業主義の發達は他のすべてのものを除外する傾向がある。)人は自然相闘争する傾向を持つからである。さうして、斯くの如き狀態にあつては、人々をして共同生活において結合すべき何ものもないのである。

この見地から歴史を見て Marx の見解が正確であり、且つ掠奪が歴史において重要な役目を演じたとしたならば、自分(Penty)は如何にして文明が發生したかを解し得ないのである。吾

々は掠奪が文明を破壊してゐることを知つてゐる。とともに吾々は掠奪が文明を創造するものでないことも知つてゐる。そのみならずかゝる見解は、吾々をして將來に對する希望を持たさないものである。もし文明の歴史が單に階級闘争の歴史であるならば、資本主義の時代の終熄を以つて、階級闘争が終滅すると考ふるべき理由は何處にあるか。それは單に争闘の形態を變へるに過ぎないのではないだらうか。(Giddens's Interpretation, Preface)

斯くの如く唯物史觀に對して Penty は不満である。さうして彼はこの唯物史觀以外の史觀を樹立しやうとするものである。然らば何故に、彼は彼自身の史觀を必要とするか。

六

Penty の歴史に對する態度は實際的である。彼は過去を知ることによつて、現時の社會問題

の解決に資せんとすることが、その史觀の目的である。故に彼は云つてゐる。「この歴史の本來の目的は、過去の經驗に照して、社會問題を論じ、さうしてその性質について明瞭な見解を得るに資せんとするにある。」吾々が現在と過去とを共によく理解するのには、現在の經驗に照して過去を見、過去の經驗によつて現在を研究することによつてである。産業主義のある方面は世界史上において新しい事實である。従つて過去はその解決について何ものをも提供しはしないのである。けれども産業主義を充分に了解する爲めには、中世紀の諸原理を知るの必要がある。何となれば、法律並に通貨、國家とギルドの如き中世の諸問題は産業主義の背後にあつて、この特殊の發達を決定したものであるからである。もしも吾々が歴史をよく了解してゐれば、吾々は産業主義の諸問題を正しく見るこ

とが出来ると、また、吾々の内的自覺から社會學說を樹立すると云ふやうな傾向が少なくなる筈である。その過去の經驗を無視すると云ふことは新しいことではない。それは文明と共に舊いものである。然し斯様な考を極度まで押し進めさうして歴史の權威によつて主張し得ないやうな提案を拒否すると云ふのは勿論誤である。けれども一つの新しい計畫を立てる前に、歴史的考察を行ふと云ふことは非常に必要なことなればならない。吾々が歴史的の研究に従事してゐると、論すべき問題が非常に狭小となり、且つ歴史的の研究によつて豊富になつた精神を以て、論議するので、無駄な討論の必要がなくなるのである。故に社會思想を論ずるものは一の歴史觀を持たなければならぬ。然るに多くの社會思想家が抱懷する唯物史觀論は、前述のやうな理由によつて、史觀として正當なるものではない

い。唯物史觀は單に過去の實狀を誤解してゐる許りでなく、現代人の思想へもその影響が及んでゐるのである。さうして吾々は、現代の社會が無智と迷信の行はれる非人間的な、階級專制の社會から發達して來たものが或は自由を喜び、自由を最も廣義にさうして最も哲學的の意義に解してゐた社會から發達して來たものと考ふる。——その考へ方の如何に従つて、吾々の思想に重大な差異が生じて來るのである。もしも人があつて、過去の社會が階級的專制をその基礎としてゐたことを信するならば、彼はすべてのものを偏見を以て見るやうになり、「進歩」なる假面の下にすべての社會的分裂の勢力を維持することになる。何となれば彼は、すべての過去からの傳統を猜疑の眼を以て見、さうしてすべての普通の社會組織に對して偏見を持つてゐるからである。

もしも中世紀が專制と無智と迷信との時代であるならば、民衆の解放は中世紀の傳統の破壊でなくてはならない。かくの如く考ふるのはその精神の論理的な人には普通のことである。之に反して、中世紀は眞の文明の榮えた時代であることを理解してゐれば、社會改造の方面において中世紀主義を取らうとするのである。斯様に歴史的認識は社會思想の構成について重大な關係がある。然らば歴史は何によつて動くものであるか。既に Penty は唯物史觀の排斥すべきことを述べた。故に彼は物質的要素を以て歴史の原動力であるとはしてゐないのである。彼の認めて、歴史の原動力とするものは、一の精神である。一の理想である。この一の精神または一の理想が如何に歴史を動かしたかを論じたのが彼の Guildsmen's Interpretation of History であつて、彼は一般に西洋史を考察することに

よつてこの問題に答へんとしてゐるのである。

(Gildsmans Interpretation. Preface 参照)

七

Penty に對して、意義ある歴史上の第一の事實は通貨の始まりである。それは紀元前約七世紀の頃のことであり、ディアの諸王が交換の媒介物として刻印ある一定量の金屬棒を創始したことに始まつてゐる。一代または二代の間にギリシヤ人の使用してゐた不定量の通貨は馳逐された。斯の工夫は一見、社會的變化を惹起しうにもなかつたが、之に従つて起つた社會的變化は寧ろ驚くべきものがある。文明即ち生活の物質的從屬品の發達はこの簡單なる發明に始まると云つてもいい位である。それは交換を容易にすることによつて外國貿易を盛ならしめ、職業並に技術上の専門化を可能ならしめたのである。然し、この利益ある發明と共に、起つて來た一つの問

題がある。それは原始的社會においては、見ることが出来なかつた經濟問題が即ち之である。何となれば通貨の創始は、近時における蒸氣機關の發明にも比すべき革命を起して地中海沿岸の諸社會の共產主義的基礎を破壊したのである。經濟的個人主義の進歩は、直ちに、ギリシヤ社會を二つの確然たる對抗する階級に分つた。繁榮せる地主、商人、金貨を一方に、農夫並に負債による奴隸を他方に、この二つの階級に分れたのである。從來は土地に對する所有權の觀念は存在しなくて、それはたゞ家族に屬し、その祖先並に子孫に屬するものであると考へられてゐた。然るに通貨の創始とともに農夫は貨幣を必要とし、遂にその土地を抵當として借金をするやうになつたのである。斯くの如くして土地の所有權は確立し、土地は益々兼併せらるゝに至つた。

然らばそれは何故に、起つたか。交換が物々交換によつて行はれてゐた時代では、商業の進歩に對し一の自然的制限があつたのである。何となれば民衆はたゞ彼等自身の使用のためのみしか交換することをしないからである。この時代にあつては交換はたゞ各當事者がその欲するところのものを有するところにおいてのみ起つた。然るに通貨の行はるゝとともにこの自然的制限は撤廢せられ、さうして歴史上始めて、利益のために物を賣買する階級が起つて來たのである。さうして是等の商人階級は金融上の専門家と化した。彼等は百姓よりも、よりよく物の市場價值を知り、このことを利用するに少しの困難をも感じなかつたのである。徐々として彼等は富み、農夫は彼等の債務者となつた。さうしてこの商人階級が生産者を奴隸化することは、通貨が一定の規定を以て制限されない社會に

あつては、何處でも同じである。だからギリシヤ人が常に賣買に關係ある諸業に對して偏見を持ち、さうして之を以て墮落的性質を有するものであるとしたのは極めて當然なことである。然し商人階級がなくては社會は存立して行くことが出来ないのは明かであるが、彼等がまた絶大の權力を振ふことは社會の幸福のためによくないことであるとした。

ギリシヤ人はこの通貨の施行と共に起つて來た問題について思ひを廻ぐらし、その政治家や法律家は其の解決のために思索したのであるが、人類はその解決について中世主義の當來するまで待たなければならなかつたのである。ギリシヤの人々はこの通貨の流通によつて起つた問題を通貨の制限によつて解決しやうとはせず、富の使用を制限することによつて、解決しやうとした。

Lycurgus はスパルタの共産的生活を、人民を共に生活せしめることにより、さうして他方においては各家族に土地を均分し、商業を極度に制限するやうに通貨を統制することによつて、之を維持せんとしたのである。この状態はペロポネソス戦争の當時まで續いて、スパルタがアテンと戦つて、利がなかつたときに、彼等は艦隊を得るためには通貨を要するとなして Lycurgus の法制から離れて行つた。之と同時に彼等はその土地制度を覆へした。さうして斷えざる戦争はスパルタの人口を減少し、一家族に多數の土地は兼併せられ、遂に貧富の隔絶は起つて來た。この趨勢は財産の相續の自由を許した Epitadeus の法制によつて助長されたのである。斯くの如き貧富の懸隔は遂に彼等の共産的生活を滅亡してしまつたのである。

アツチカにおいては問題が少しく異つた形相

を呈してゐる。Lycurgus の解決はたゞに時計を後戻りさせるやうなことであつたばかりでなく、時計を靜止さすやうなものであつた。然るにアツチカにおける Solon の解決は之と異つてゐた。彼は通貨と之から起つた社會的變化とを受け容れて、さうして市民の權利義務を決定すべき標準として門閥の代りに財産を以てしたのである。かくて彼は民衆をして、Lycurgus の如く強烈なる訓練を受けしめることなく、單に富を集積する誘惑を除かんとした。これが彼の奢侈禁止法の目的であつた。この法制は彼の時に於いて非常によく行はれたのであるが、諸種の經濟問題はこの法制によつてよく解決することが出来なかつたのである。かくてその國家は、海濱黨、平野黨、山嶽黨の三派に分れて相争つた。この危機に當つて、山嶽黨の首領である Diastatus の如き才能ある人が一時は解決した

やうなもの、遂にこの經濟的困難を徹底的に解決するには至らなかつたのである。

かくて外國貿易の發達によつて、アテンは一の海港となり、産業的都市となつた。さうして株式取引や、金貸やその他のあらゆる種類の金融的投機が起つて來たのである。この結果として社會は利害の相反する二個の階級に分れた。その一は少數で多額の資本を擁し、その主なる目的はその増加にあつた。他の一は多數民衆であつて、彼等はこの金錢上の貴族に對して多大の反感を持つてゐたものである。このときに當つてアテンの金權政治はその地位を確立したのであるが、その興隆の基礎は既に Solon が階級を財産別にした事實に始まつてゐるのである。かくて金權政治の確立と共にこの社會のソリダリテは失はれたのである。

斯くの如くギリシャ社會の歴史を通觀して見

ると、それは實に階級争闘に終つてゐる。それは何故に然りしか。無制限の通貨は經濟的個人主義を發達せしめ、財産の共有と社會のソリダリテを亡ぼした。それは農夫と從來ギリシアを支配してゐた宗教的貴族を亡ぼして、政治的權力を少數の金權者流の掌中に收めた。彼等はその直接の利益以外の何事をも顧慮しないのであつた。かくてギリシャの社會は階級的反目の社會となり、社會革命の可能性を有する社會となつたのである。ギリシアを亡ぼした主要な要素は、その無制限な通貨と、之に伴ふ利益の爲めの賣買を許容する思想であつたのである。(未完)